

# 松野遺跡第42-1・2次発掘調査報告書

-新長田駅南第2-B地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う発掘調査-

2010年3月  
神戸市教育委員会

巻頭図版



調査地遠景

# 松野遺跡第42-1・2次発掘調査報告書

-新長田駅南第2-B地区震災復興第二種市街地内開発事業に伴う発掘調査-

2010年3月  
神戸市教育委員会

## 序

神戸市長田区は震災による被害の大きかった地域のひとつでした。その後、今まで地元の皆様の大変なご努力もあって、あたらしい街づくりが着々と実を結んできております。

今回ご報告する松野遺跡の発掘調査は、若松公園の整備に伴うもので、弥生時代の溝が確認されるなど周辺の歴史を考える上で貴重な成果がありました。いっぽう整備後の公園にはモニュメントも完成し、新しい観光のスポットとしても注目され、長田の歴史に新たなページが書き加えられました。

本書が地域の歴史を知っていただくための一助となり、文化財の保護に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係者および地域住民のみなさまの多大なるご理解とご協力によって、実施することができましたことを厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

神戸市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、神戸市長田区若松町2丁目において、平成20年度に発掘調査を実施した、松野遺跡第42-1次、第42-2次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は新長田駅南第2-B地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので神戸市教育委員会・跡神戸市体育協会が神戸市都市計画総局の委託を受けて実施したものである。
3. 本書写真図版のうち現地での遺構写真是調査担当者によるもので、航空写真是株GEOソリューションズによる。また遺物写真撮影については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 牛鳴 茂氏の指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。挿図写真に使用した調査前の風景写真については、神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所より提供いただいた。
4. 本書の、第42-1次調査の遺構の記述は調査担当者の原稿をもとに内藤が加筆し、遺物に関する記述もおこなった。第42-2次調査の記述と全体の福集については内藤がおこなった。
5. 本書「第5章」の、花粉およびプラント・オパール分析については㈱古環境研究所に委託した。
6. 本書に使用した標高は東京湾平均海面（T.P.）を、方位座標については平面直角座標系第V系（日本測地系）を使用している。
7. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸主部」「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1の地形図「大橋」を使用した。
8. 発掘調査で出土した遺物および図面・写真等の記録類は、神戸市教育委員会において保管している。
9. 現地での発掘調査の実施については、神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所の協力を得た。

## 目　　次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章 調査区の設定	7
第1節 調査区の設定	7
第3章 第42-1次調査	8
第1節 基本層序	8
第2節 調査の概要	9
第3節 小結	13
第4章 第42-2次調査	14
第1節 基本層序	14
第2節 調査の概要	15
第3節 小結	22
第5章 自然科学分析	23
第42-2次調査における自然科学分析（株式会社 古環境研究所）	
第6章 まとめ	29
写真図版	

## 写真 図版目次

図版 1	1 調査地遠景（南より） 2 調査地遠景（北西より）	図版 8	1 第42-2次調査 SK01 2 第42-2次調査 SK02
図版 2	1 第42-1・2次調査補助（モザイク）	図版 9	1 第42-2次調査 SK03 2 第42-2次調査 SD01
図版 3	1 第42-1次調査 調査区（東半部）全景 2 第42-1次調査 調査区（東半部）全景	図版10	1 第42-2次調査 SD01（断面） 2 第42-2次調査 SD01（断面）
図版 4	1 第42-1次調査 調査区（西半部）全景	図版11	1 第42-2次調査 流路 2 第42-2次調査 流路（断面）
図版 5	1 第42-1次調査 調査区（西半部）全景 2 第42-1次調査 Pit12	図版12	1 第42-2次調査 第2遺構面土器群 2 第42-2次調査 調査区北壁（断面）
図版 6	1 第42-1次調査 SD01 2 第42-1次調査 SD01（断面）	図版13	1 第42-1次調査 出土遺物
図版 7	1 第42-2次調査 第1遺構面全景 2 第42-2次調査 第1遺構面全景	図版14	1 第42-2次調査 出土遺物

## 挿図目次

図1	松野道路位置図	4
図2	今回の調査地と周辺の調査	5
図3	周辺遺跡分布図	6
図4	調査区設定図	7
図5	調査区断面図	8
図6	Pit12平面・断面図	9
図7	Pit12出土遺物実測図	9
図8	SD01出土遺物実測図	9
図9	遺構面平面図	10
図10	SD01平面・断面図	11
図11	調査区断面図	14
図12	SK01出土遺物実測図	15
図13	SK01平面・断面図	15
図14	SK02平面・断面図	15
図15	第1遺構面平面図	16
図16	SK03平面・断面図	17
図17	SD01平面・断面図	18
図18	SD01出土遺物実測図	19
図19	遺構に伴わない出土遺物	19
図20	流路平面・断面図	20
図21	土器群平面・断面図	21
図22	淡灰褐色シルト出土遺物実測図	21
図23	第2遺構面平面図	22
図24	北壁中央部における花粉ダイアグラム	24
図25	北壁中央部におけるプランクト・オパール分析結果	28
図26	周辺調査区主要遺構図	30



松野遺跡遠景

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯 JR新長田駅周辺地域は新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴い、平成7年10月より試掘調査が開始され、翌8年7月から調査を実施した。その後平成11年度末には調査が終了し再開発ビル建設が建設されている。その結果、古墳時代中期～後期の堅穴住居跡を中心とする集落を検出し、当地域の古墳時代の中心的な集落であったと位置付けられている。

今回の調査は、若松町6丁目における若松公園の再整備事業に伴うものである。平成20年4月に試掘調査を実施し遺構が確認されたため、事業地の約3,900m<sup>2</sup>について平成20年7月29日よりそれぞれ第42-1次、第42-2次調査として実施した。

なお、事業地の南西角地の一部については、すでに平成11年度に防火水槽建設予定地として調査（平成11年度、松野遺跡第9次調査として実施、その後、平成12年度の報告書刊行に際し、第7次調査に次数が改められる）を実施しており、そこでは、中世の掘立柱建物や井戸、耕作痕のほか、古墳時代の井戸、弥生時代の溝を検出していた。

調査組織 発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導を得て実施した。それぞれの調査組織は、以下のとおりである。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

工樂 善通 大阪府立狭山池博物館長

和田 晴吾 立命館大学 文学部教授

教育委員会事務局

現地調査（平成20年度）・遺物整理（平成21年度）

教育委員会事務局

	平成20年度	平成21年度
教育長	横口秀志	横口秀志
社会教育部長	黒住卓久	大寺直秀
社会教育部参事 (文化財係長事務取扱)	柏木一孝	柏木一孝
社会教育部主幹	渡辺伸行・丸山 澄	渡辺伸行
埋蔵文化財調査係長	千種 浩	千種 浩
文化財課主査	丹治康明・安田 澄	丹治康明・安田 澄 齋木 駿
事務担当学芸員	河部敬生・中谷 正	中谷 正
遺物整理担当学芸員	黒田恭正	黒田恭正・佐伯一郎
保存科学担当学芸員	中村大介	中村大介

財神戸市体育協会

	平成20年度	平成21年度
会長	表 孟宏	表 孟宏
副会長 (専務理事事務取扱)	小川雄三	小川雄三
常務理事	研 弘四郎	研 弘四郎
総務課長	赤沢 徹	赤沢 徹
総務係長	箕輪龍男	箕輪龍男
調査担当学芸員	東 寿代秀・ 齋井太郎・内藤俊哉 (第42-1次調査) 内藤俊哉 (第42-2次調査)	
遺物整理担当学芸員 (報告書作成)		内藤俊哉

## 調査の経過

それぞれの調査の経過は、次のとおりである。

**第42-1次調査** 平成20年7月29日より重機掘削を開始する。調査対象面積は約1,800m<sup>2</sup>で、残土置き場を確保するため東西2分割し、まず東側より調査を実施することになる。

従前の建物基礎を撤去した後に順次人力による遺構検出作業を行う。

8月27日、調査区南部において弥生時代の溝を確認、9月2日には石包丁が出土した。

また9月8日には調査区の向かいにある駒ヶ林中学校の選択社会科の生徒25名による見学が催された。

遺構掘削後9月9日にクレーンによる空中写真撮影を実施する。

その後、遺構の記録作業などの調査を行い、9月11日より断ち割りトルンチを設定し下層の確認調査を行う。また、調査区南で検出された8角形の木枠をもつSX02について重機で掘削を行う。

下層より遺構・遺物が確認されなかったため9月16日より埋め戻し作業にかかり東側部分の調査を終了した。

引き続き9月18日より西側調査区の重機掘削を開始する。東側と同様基礎を撤去し人力掘削にかかる。

10月6日より遺構検出、遺構掘削を行い、10月16日にはクレーンによる写真撮影を実施する。

10月17日からは、遺構面の遺構写真撮影や記録作業を行い、遺構面の調査は10月21日までに終了し、同時に埋め戻し作業にかかる。

10月24日に撤収作業を行い、すべての現地調査を終了した。



挿図写真1 調査前状況（南より）



挿図写真2 調査前状況（北西より）



挿図写真3 重機掘削状況（42-2次調査）



挿図写真4 調査風景（42-1次調査）

第42-2次調査 平成20年10月28日より調査を開始する。調査面積は2,100m<sup>2</sup>で、まず重機掘削および基礎撤去作業を行う。

人力掘削後、第1造構面として土坑と溝、ピット、流路等の造構を検出し、12月25日まで掘削と図化・写真撮影等を行う。また搅乱坑の断面において、造構面のさらに下層に土器が存在することを確認する。途中、12月19日にはラジコンによる空中写真撮影を実施する。

造構掘削や図化・写真撮影作業が終了した翌21年1月5日から第1造構面のベース層を掘削する。

調査区中央部を中心として土器群を検出、1月9日に図化作業と写真撮影を行う。

さらに掘削を行い、下層を形成する流路を確認する。1月28日に全景写真を撮影、その後図化作業にはいり、断ち割りトレーニチを設定し下層の確認調査を行う。同時に下層の花粉およびプラント・オバール分析の試料のサンプリングを行う。

2月3日からは埋め戻し作業にかかり2月12日に撤収作業を行い、2月13日に完了してすべての現地調査を終了した。



挿図写真5 クレーン撮影作業（42-1次調査）



挿図写真6 ラジコン撮影作業（42-2次調査）



挿図写真7 跡ヶ林中学校見学会（42-1次調査）



挿図写真8 微化石分析サンプリング作業（42-2次調査）



挿図写真9 調査完了状況

## 第2節 遺跡の位置と歴史環境

松野遺跡は、六甲山南麓を流れ出る妙法寺川と茹藻川によって形成された沖積地に立地しており、北西から南東にかけて緩やかに傾斜する地形で現地形の標高は7m前後を測る。

この遺跡の発見は、昭和56年度に松野通4丁目において市営松野住宅建設事業に先立つ試掘調査による。引き続いて実施された第1～2次調査においては、柵列と溝に囲まれた古墳時代の豪族居館が確認され全国的に注目された。

平成8年からは、震災復興事業として新長田駅南地区において市街地再開発事業が実施され、さらに平成11年には、第1次調査地の北西にあたる松野通4丁目地区において区画整理事業に伴う街路部分の調査、また翌12年からは区画整理地内に新築される個人住宅の発掘調査も実施され、発掘調査は飛躍的に増加した。

これまでの調査によって、JR新長田駅の西に線路を挟んで南北約400m、東西100mほどの拡がりをもち、縄文時代晚期から中世に至る遺構や遺物が確認されている。

とくに、遺跡の中央から南の部分にあたる第3～7次調査においては、古墳時代の堅穴住居や掘立柱建物、井戸などが多くの遺構が検出され、当時の集落の存在が明らかとなった。また遺構内からは、多量の滑石製品や未成品が出土し、玉製作がおこなわれていたと考えられている。

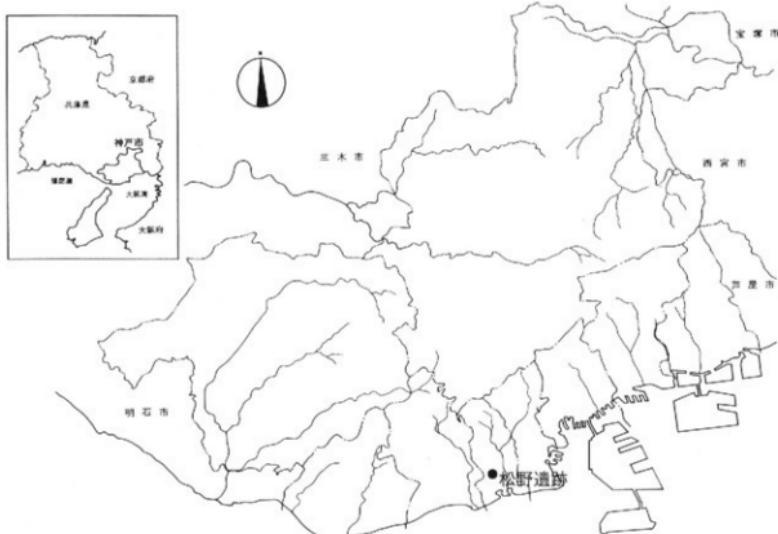


図1 松野遺跡位置図

周辺には、多くの遺跡が存在することが知られている。国道2号線を挟んですぐ南には、古代末～中世の掘立柱建物や井戸などが多く検出された二葉町遺跡がある。東に隣接して、中世の屋敷墓や弥生時代の溝が確認された大橋町遺跡が市街地再開発事業に伴う最近の調査によって発見されている。さらに東には古墳時代の竪穴住居の検出された大橋町東遺跡、縄文時代晚期の溝が検出された若松町東遺跡、神楽遺跡、古墳時代の集落や奈良～平安時代の掘立柱建物群が確認された御藏遺跡がある。

北には、弥生時代前期の集落や墓域が確認されている戎町遺跡が存在し、その南西には奈良～平安時代の掘立柱建物が多数みつかり須磨駅家の比定地とされる大田町遺跡も存在する。

一方、この地域の前期古墳としては、北西の丘陵上得能山古墳、北の丘陵上には全長約50mの会下山二本松古墳がある。

また南東の海岸部には、中期古墳で全長100mをこえる前方後円墳であったとされるある念仏山古墳が存在している。

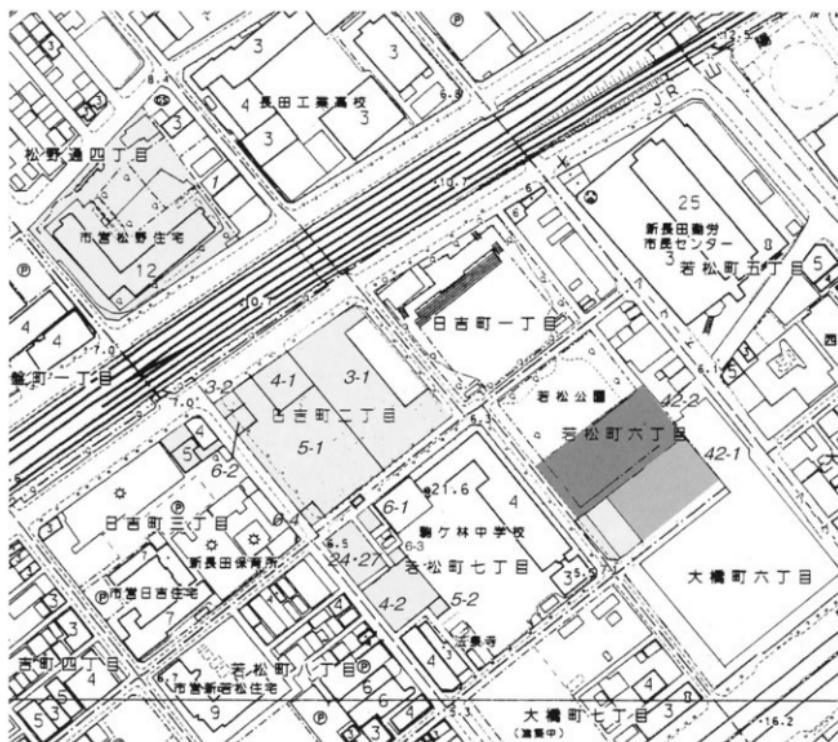


図2 今回の調査地と周辺の調査

## 主要参考文献

1. 千種 浩編 「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1983
2. 口野博史編 「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」神戸市教育委員会 2001
3. 関野 直編 「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水谷遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002
4. 中谷 正 「大橋町遺跡第1次～1～6次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2006
5. 藤井太郎編 「大橋町遺跡第2次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2007
6. 新修神戸市史編集委員会編 「新修神戸市史」歴史編 I 自然・考古 神戸市 1989

1. 松野遺跡 2. 二葉町遺跡 3. 若松町遺跡
  4. 大橋町遺跡 5. 若松町東遺跡 6. 大橋町東遺跡
  7. 児町遺跡 8. 大田町遺跡 9. 大手町遺跡
  10. 長田本町道跡 11. 長田本庄町遺跡 12. 鷹取町遺跡
  13. 神楽遺跡 14. 御蔵遺跡 15. 御船遺跡
  16. 長田神社境内遺跡 17. 五番町遺跡 18. 三番町遺跡
  19. 上沢遺跡 20. 室内遺跡 21. 大開遺跡
- A. 念仏山古墳 B. 得能山古墳 C. 金下山二本松古墳

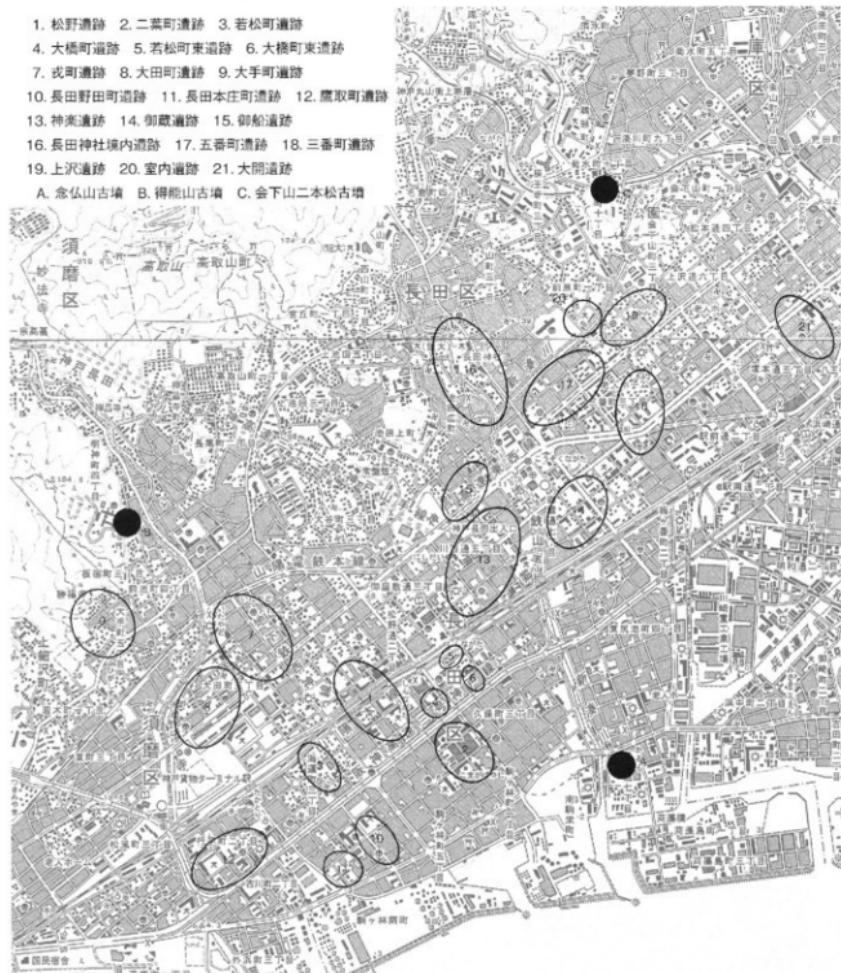


図3 周辺遺跡分布図 (S=1:25,000)

## 第2章 調査区の設定

### 第1節 調査区の設定

今回の調査対象となった部分は、東西61m、南北72mの事業地のうち未調査の部分約3,900m<sup>2</sup>である。

発掘調査は、本工事の工程の関係から南側の東西70m、南北25mの、1,800m<sup>2</sup>について第42-1次調査とし着手し、東半部、西半部と反転して調査を実施した。この調査が一旦終了した後、埋設管の撤去工事等を待って、さらに北側の残りの部分2,100m<sup>2</sup>について、第42-2次調査として実施した。

なお、調査区の敷地は周辺一帯の街並み同様に座標軸に対して約45度振っている。

調査区の位置関係の呼称の煩雑さを避けるために、本報告においては便宜上、丘陵地形に向かうJR線路側を北、海岸線に向かう国道2号線側を南とした。

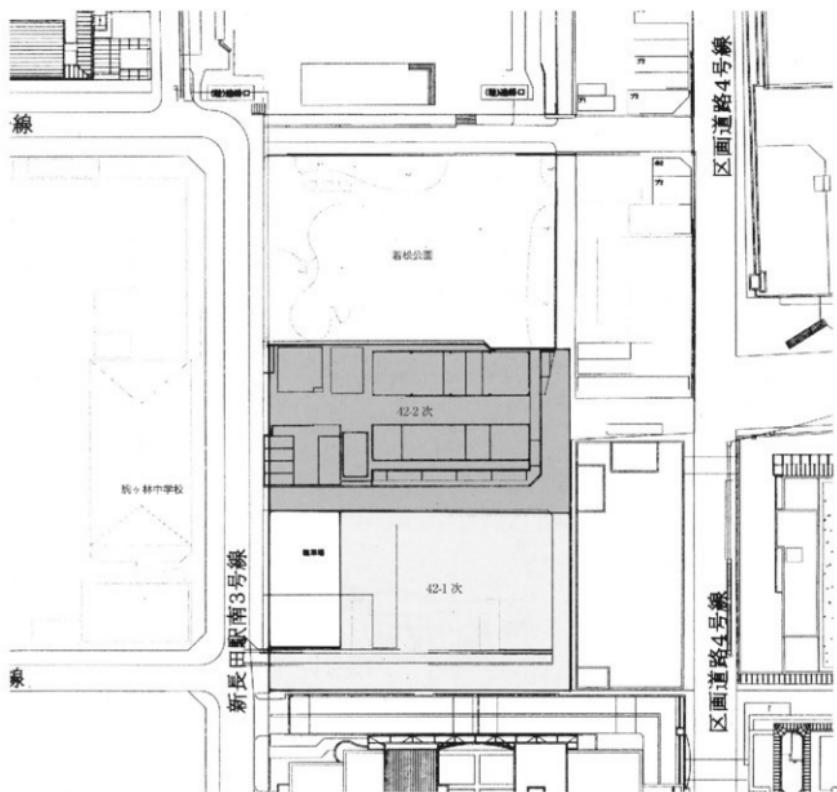


図4 調査区設定図 (S=1:500)

## 第3章 第42-1次調査

### 第1節 基本層序

今回の調査地は、従前建物の基礎などによる搅乱がひどく、すでに大半の部分で遺構面が失われていた。調査区内には、震災後の整地層、近代～戦前までの建物基礎及びそれに伴う整地層があり、その下に近世～近代の旧耕土、中世の旧耕土が堆積する。

調査区の西半では耕土層の下面で黄色シルトの基盤層となり、溝やピットを検出した。東側にはやや下がり地形となり、この部分には暗灰色シルト層が堆積する。この層の下層、灰色シルト層が遺構面となり、溝や小規模なピットを検出した。また調査区の中央付近には、北西から南東方向に向かい流れ込んだ砂礫層が帶状に堆積しており、この層上が遺構面を形成する。

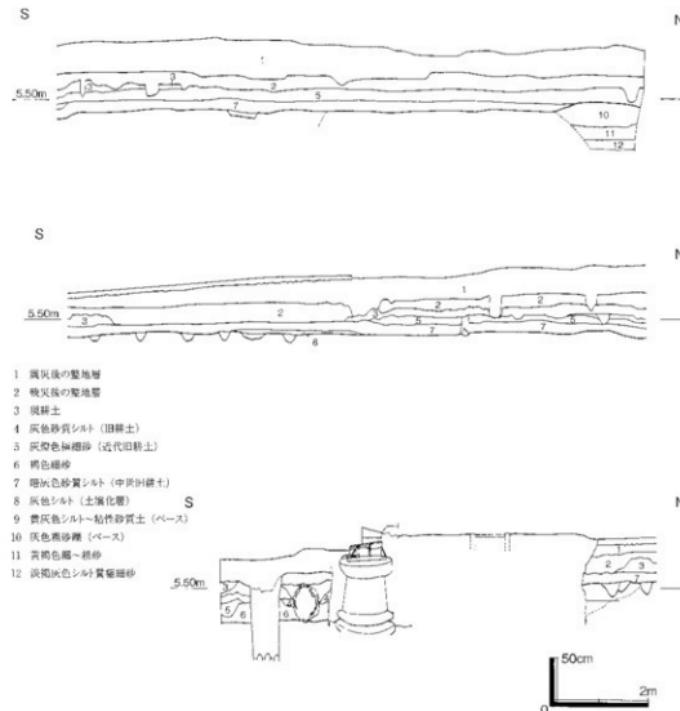


図5 調査区断面図

## 第2節 調査の概要

調査は、盛土・搅乱層、近世耕土層までを重機により除去し、以下は人力により遺物・遺構の検出作業を行った。

### 検出遺構

#### ピット

検出した遺構は、ピット約30基、溝33条、土坑（落ち込み）3基である。

調査区全域において約30基のピットを確認した。

径20~30cm、深さ30cm前後の柱穴と考えられる形状のものが散見されるが、建物や柵などの構造物には復元できなかった。いずれのピットも出土遺物が乏しく、明確な時期の不明なものが多い。

唯一、Pit12から須恵器塊が出土した。

#### Pit12

調査区中央部の北に位置する、径20cmの円形のピットである。断面形は、U字形で深さ18cmを測る。上部を搅乱によって削平されている。埋土の中層から須恵器の塊が1個ほぼ完形の状態で出土した。

#### 出土遺物

口径16.0cm、器高5.0cmの東播系の須恵器の塊である。高台の底部に糸切り痕をのこす。時期は、12世紀末から13世紀初頭頃のものと考えられる。

#### 溝

調査区の東側で、最大幅約5.0mの溝1条のほか、

幅0.3mほどの溝を数条検出し、調査区の西側では、幅0.2m前後で、平行して架かれる約20条の溝などを検出した。

#### SD01

調査区の東端で検出した北西から南東方向に流れる溝である。最大幅約5.0m、深さは残りのよい部分で最大約50cmである。溝の断面の形状は擾形で、上方は浅い皿状、下部は幅約0.6mで、壁の立ち上がりは垂直に近い。後世の搅乱により上方が削られた部分は、この下部の断面箱形の部分が辛うじて残る程度である。

今回の調査区内での検出長は約25mである。出土遺物は少ないが、中央部からやや北寄りの地点から石庖丁1点が出土しており、そのほかに蓋形土器片などが出土した。弥生時代中期の遺構と考えられる。

#### 出土遺物

弥生土器は甕や蓋形土器が出土している。甕はいずれも細片で図化できなかった。蓋形土器はⅡ様式のもので、口径26.0cm、器高9.1cmで、中ほどから外方へ広がる。石庖丁は、砂岩製で、刃部は両刃で緩く外湾している。全体に摩耗しており、約3分1が欠損している。

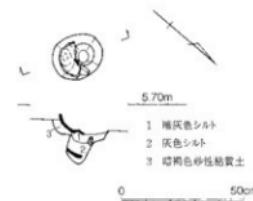


図6 Pit12平面・断面図



図7 Pit12出土遺物実測図



図8 SD01  
出土遺物実測図

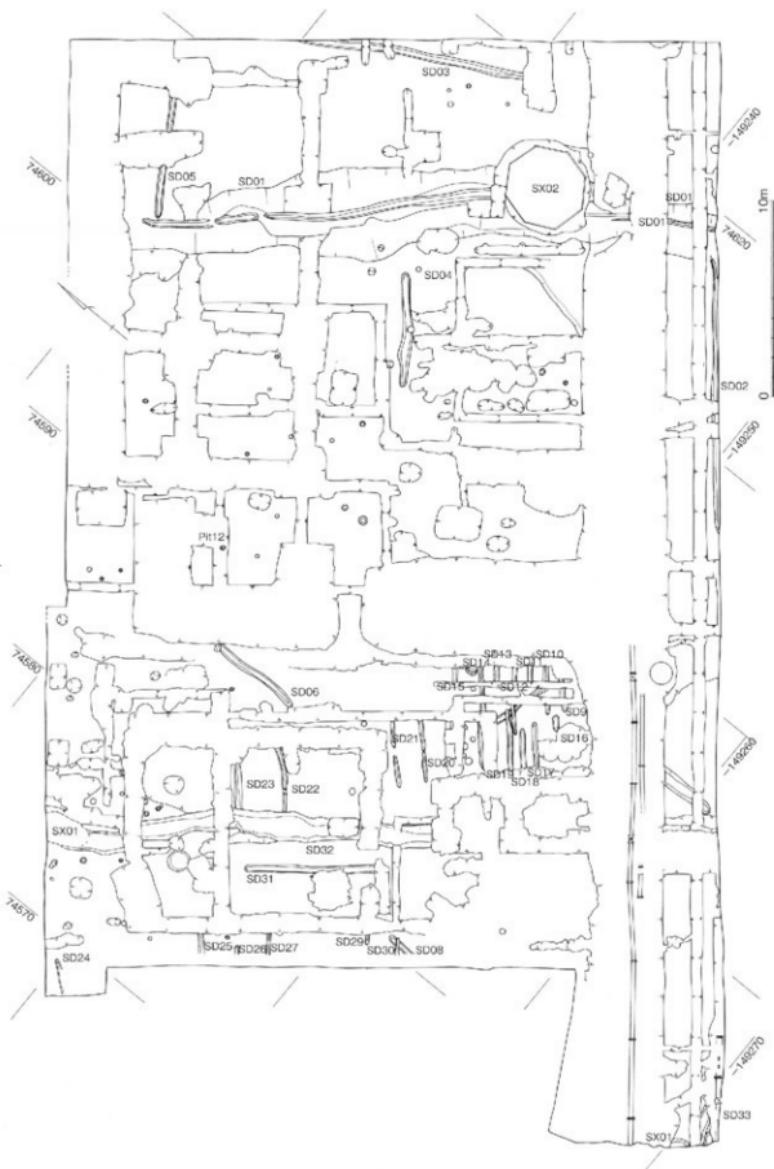


図9 遺構面平面図

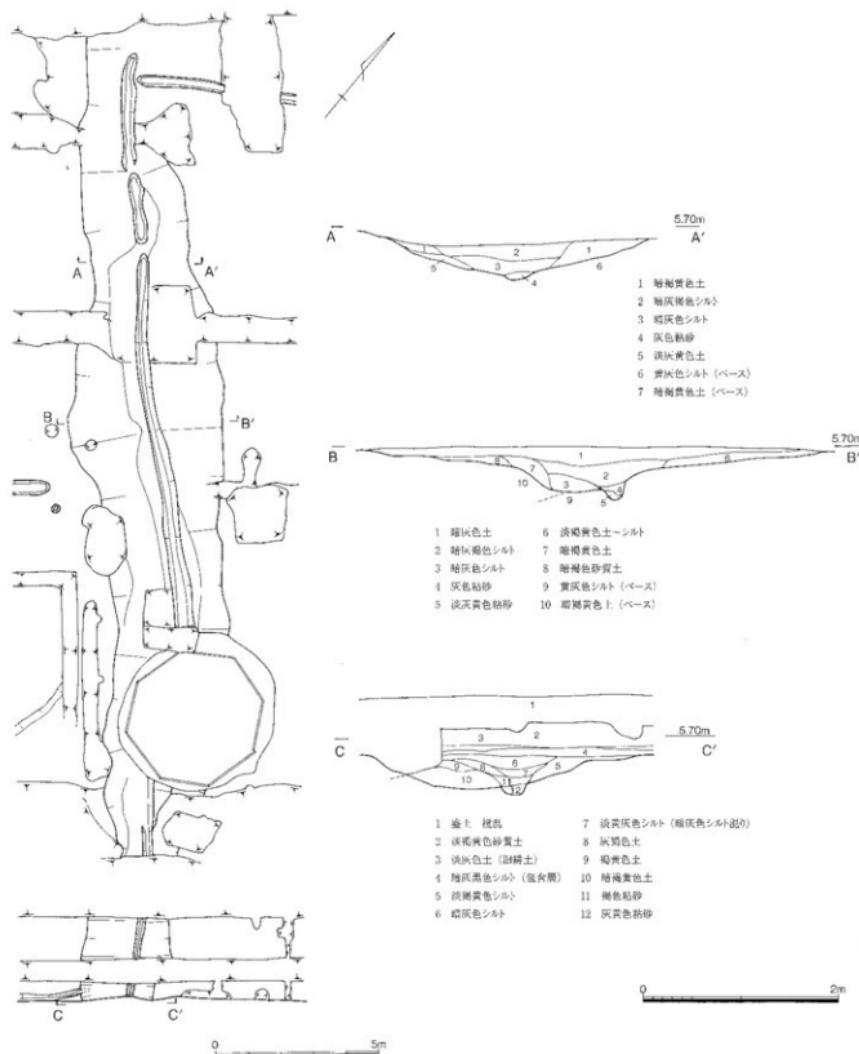


図10 SD01平面・断面図

- SD02 調査区南、壁際で検出した溝である。ほとんどの部分が調査区外にあるが、その部分は現代の水道管敷設時の掘形により壊されている可能性が高い。東端、SD01と交差する部分でやや北寄りに曲がり、この部分で溝幅約0.2mであったことがわかる。深さは約10cmが残る程度である。細かく碎けた瓦器皿の細片が出土しており、中世の遺構である。
- SD03～05 調査区東半で検出した幅約0.4m、深さ10cm程度の浅い溝で、埋土はいずれも暗灰色シルトの單一層である。遺物は出土しておらず、遺構の詳細な時期、性格などは不明である。
- SD06～08 調査区西半で検出した幅約0.4m、深さ約10cmの溝で、SD06・08が南北方向、SD07が東西方向となる。SD08は今回の調査区ではわずかに1.0mほどを検出したに過ぎないが、第7次調査区から続く溝で、先の調査と合わせた検出長は約8.0mとなる。SD06から中世の須恵器、土師器の小片が極少量出土した。
- SD09～30 調査区西半で検出した溝群で、各溝の幅は約0.3m、深さ約10cmである。溝の間隔は0.5～1.2mとばらつきがあるが、検出できた溝はいずれも浅く、耕作痕と考えられ、いずれも現在の地割りに平行する。中世の須恵器、土師器の小片が極少量出土した。
- SD31 幅0.5m、深さ20cm、現在の地割りに沿った北西から南東方向の溝である。埋土は中世の旧耕土と同様の上層である。遺物はほとんど出土していないが、わずかに須恵器片が出土している。埋土の状況と合わせると、中世の遺構と考えられる。
- SD32 SD31の東側に位置する溝で、わずかに蛇行する。調査区内での検出長約20m、幅約1.5m、深さ約30cmである。埋土は乳白色の砂質シルトを基調とし、部分的に砂が混じる。近世の陶磁器片がわずかに出土した。
- 土坑(落ち込み)** 3基の土坑状の落ち込みを検出した。
- SK01 調査区の南西隅で一部を検出した。径1.0mほどで、深い落ち込みになるものと思われる。中世の須恵器に混じり、近世の陶磁器片が出土している。
- SX01 SD32の北端は土坑状になり、砂と礫が堆積する。土坑状部分は長辺2.5mほどの平面積円形を呈する。木杭が疊らに打ち込まれており、杭の近くから近世の陶磁器片が出土した。また、溝SD32の南寄りの溝底には長辺約1.5m、短辺約1.0mの平面形が長方形で、深さ約1.5mの土坑状の部分がある。埋土は耕土層や基盤層である黄色シルトをブロック状に含む土で、一度に埋め戻されたと考えられる状況である。遺物は出土していない。
- SX02 調査区東半南寄りで、SD01を切り込む径約5.0mの大型の落ち込みを検出した。円形の掘形の中に縦板を、平面八角形に並べる。上層には鉄屑、ゴム片などが大量に投棄され、下層からは近世～戦中頃までの陶磁器類や下駄などが大量に出土した。戦災後の片付けに利用された穴であるが、構築年代、木組みの構造物の用途は不明である。
- 出土遺物** 出土遺物には、戦時中の軍事優先の経済統制が色濃く反映された遺物が多く含まれていた。時代的には現代の範疇に入るものの参考のため紹介する。
- 陶磁器の碗には、高台内に生産者記号



挿図写真10 SX02

(統制番号)が入れられたものがみられ、「瀬247」「瀬641」「瀬692」など瀬戸地区のものや「岐97」「岐140」「岐364」「岐阜372」「岐414」「岐757」など土岐・多治見周辺のもの、「名23」「名24」など名古屋市域のもの「有15」など有田産のものが確認できた。

また、直径5cmほどの中空の長球形で直径7mmほどの穴が全面に16箇所開けられた補助炭といわれる素焼きの土製品や、「防衛食器」とよばれる食品保存用の容器の蓋など戦時において工夫された瀬戸窯の代用品類がみられる。

### 第3節 小 結

今回の調査地については、後世の建物による搅乱がひどく、造構、造物の残りが非常に悪かった。出土遺物は、旧耕土層からの出土が大半で、中世の須恵器および土師器を中心とするものである。

造構については、調査地の西半で耕作に伴う溝と柱穴を検出し、中央部付近まではピットが散見され、東半では溝が確認された。

南東方向にわずかに下がる地形を呈し、造構、遺物が希薄になることから、平成11年度第7-1次調査で指摘されていた通り、集落域の縁辺部になることが追認された。

第7-1次調査では中世の掘立柱建物1棟が検出されたが、今回の調査では、ピットの検出はあるものの搅乱の影響もあり、建物などは復元できなかった。

また、古墳時代の造構・遺物は全く確認されておらず、搅乱などの影響もあるが、再開発事業に伴う調査で検出した一連の古墳時代の集落域は、第7次調査で検出した井戸1基から以東には括りをみせないものと考えられる。

また、調査区の東寄りで検出した溝からは、弥生時代中期頃と考えられる土器片や、石庖丁の出土があった。これまでの松野遺跡の調査でも、基盤層や下層の堆積層から縄文時代晩期～弥生時代前・中期頃の遺物が出土しており、周辺に居住域などに伴う造構の存在が推測されるが、今のところ明確な造構は確認されていない。

今回の調査においても、溝の存在は確認できたものの、出土遺物の量は非常にわずかで、ごく近隣に居住域があったとは考えにくい。ただ、土器片や石庖丁が出土したこと、調査地周辺が生業域であったことを想定させるもので、周辺の同時期の遺跡の立地、分布状況などから生活圏などの検討が必要になるであろう。



挿図写真11 第7-1次調査

## 第4章 第42-2次調査

### 第1節 基本層序

調査地は、第42-1次調査地の北に隣接する。南北34m、東西58mの長方形の範囲である。調査区内には第42-1次調査区と同様、従前の建物の基礎・地中梁等が多く残存しており、大きく攪乱されていた。調査に先立ってこれらの障害物の解体・撤去を実施した。

#### 基本層序

調査区の基本層序は、地表下50~60cmの盛上下に部分的に旧耕土・床土が数cm堆積し、すぐに第1造構面の基盤層となる。第1造構面の基盤層は、調査区の東側約3分の2では層厚10cm~20cmの灰褐色粘質土であるが、これは直下に堆積する層厚20cmの黄褐色シルト・黄灰色シルトが著しく土壤化したものと考えられる。なお削平を受けている西側部分においては、黄灰色シルトが露呈している。

さらに調査区の中央~東部にかけては、黄褐色シルト・黄灰色シルトの下に僅かに遺物を含む淡灰褐色シルトが10cmほど堆積しており第2造構面の基盤層となる淡灰黄色シルトに至る。

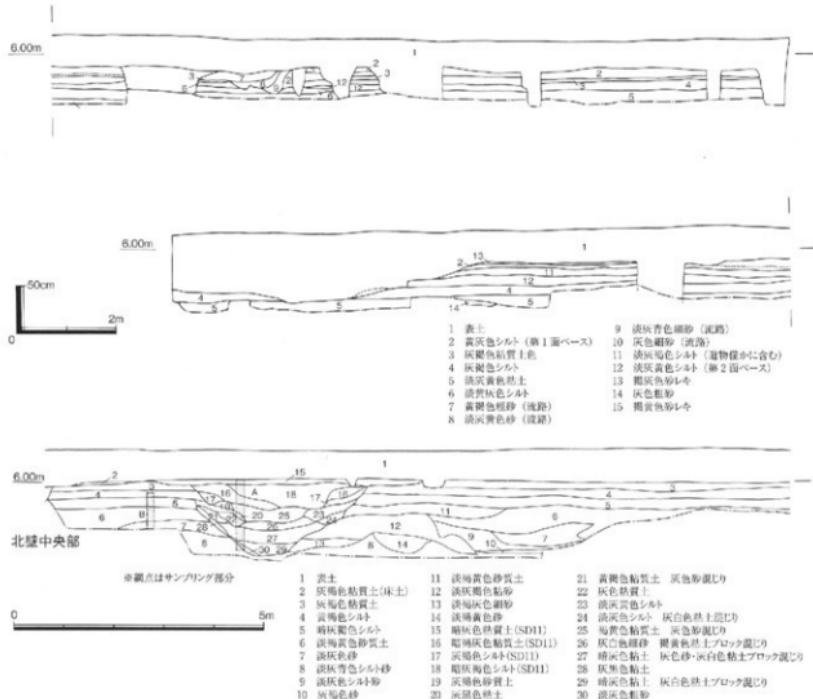


図11 調査区断面図

## 第2節 調査の概要

弥生時代中期～近世と縄文時代晚期以前と考えられる2面の遺構面を確認した。  
第1遺構面　調査区の全域において、土坑4基と溝18条、ピット約20基および流路1条などが検出されている。以下、主な遺構について略述する。

SK01　　調査区中央部の南壁沿いで検出された、径1.2m、深さ65cmの円形の土坑である。底部には粘土状の埋土が堆積している。水溜め状の遺構の可能性がある。底部より須恵器の壺が完形で出土した。

出土遺物　須恵器壺は口径16.8cm、器高4.5cmで見込み部に僅かに凹みが残り、高台に糸切り痕がのこるものである。時期は12世紀前半と考えられる。このほか、須恵器の鉢の小片が出土している。

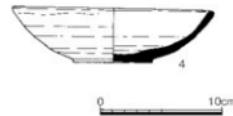


図12 SK01出土遺物実測図

SK02　　調査区西部で検出された、径3.0m、深さ1.7mの円形を呈する大型の土坑である。断面形は漏斗状を呈する。底部付近では湧水が激しかった。埋土は砂・粘土などで、いっきに埋め戻された状態を示す。水溜の遺構と思われる。遺物は殆ど出土していないが、近世の陶磁器の小片が数点出土している。

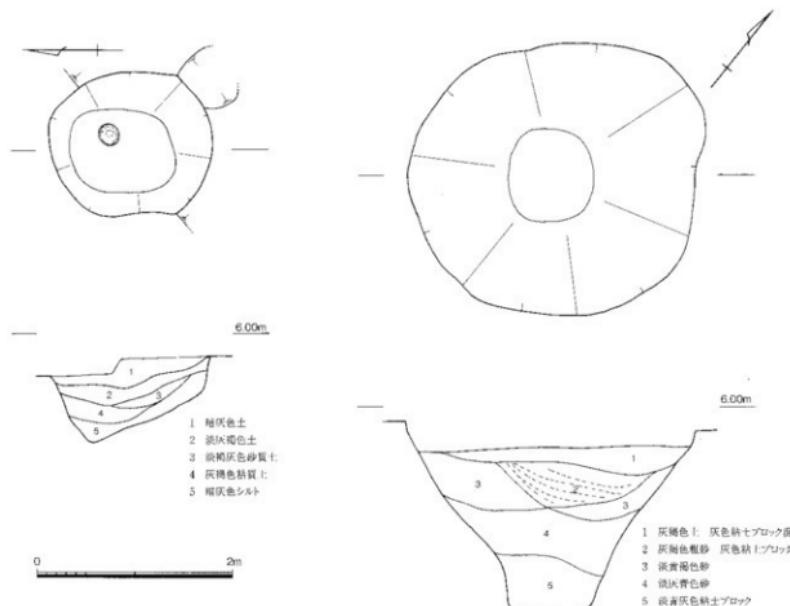


図13 SK01平面・断面図

図14 SK02平面・断面図

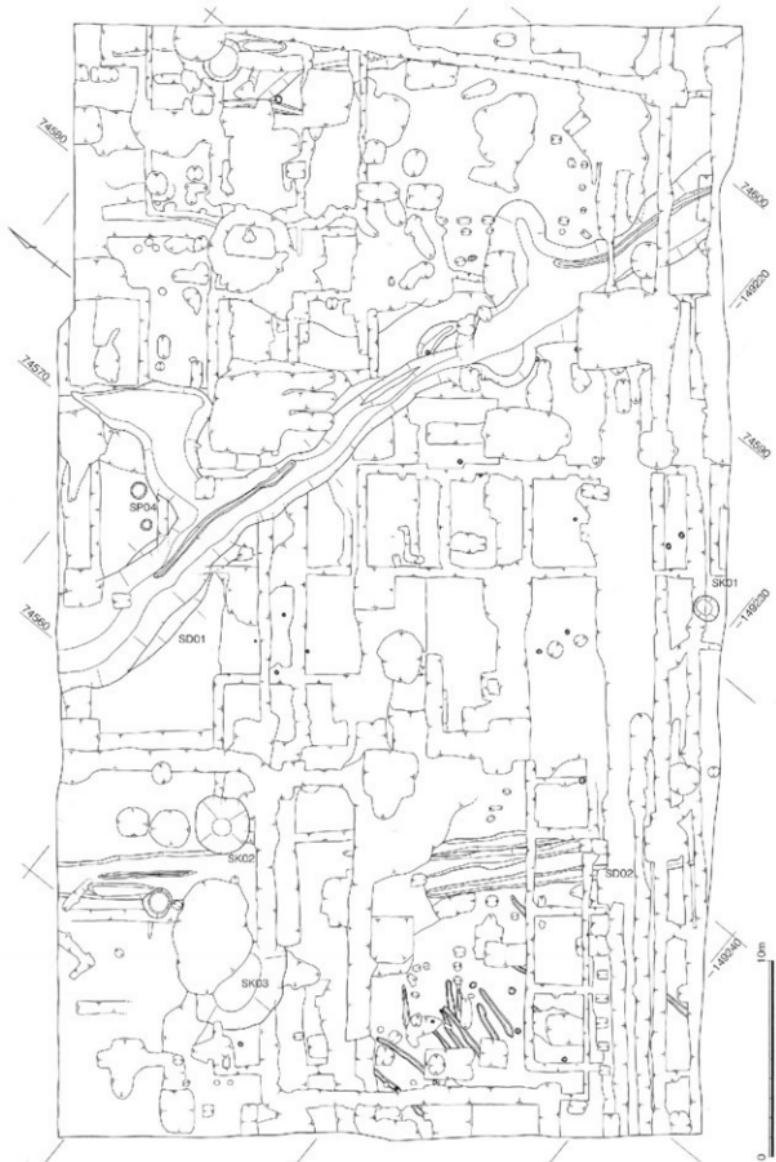


図15 第1遺構面平面図

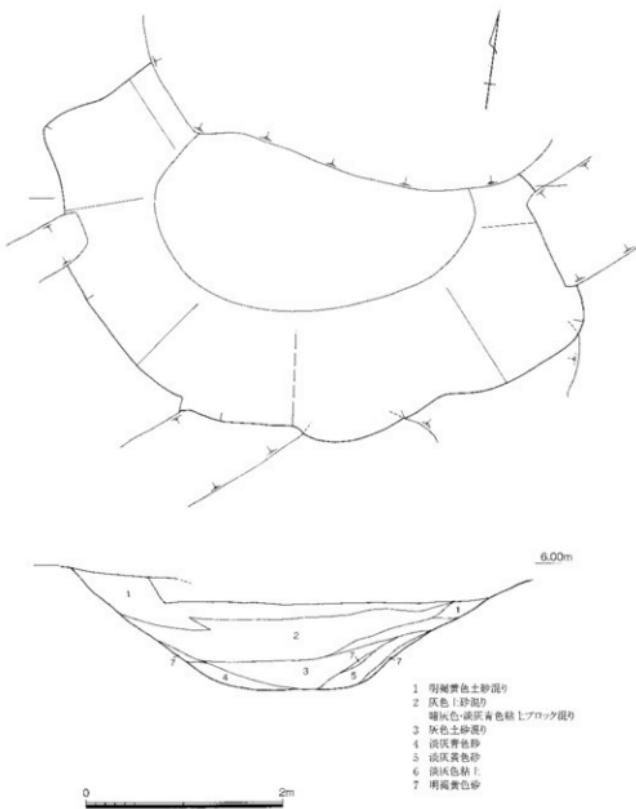


図16 SK03平面・断面図

SK03 調査区西端部において検出された、東西5.5m、南北2.2m、深さ1.0mの楕円形の遺構である。北側3分の1ほどを擾乱により削平されている。断面形は、捕鉢状でSK02同様に埋土は砂・粘土などで、いっきに埋め戻された状態を示している。

遺物は殆ど出土していないが中世の須恵器がみられる。

SD01 調査中央部を南北に流れる幅1.5~4.0m、深さ30~50cmほどの溝である。断面形は緩いU字形であるが、部分的に底部に細い溝状の掘り込みがみられ漏斗状になる。この部分については、溝浚えや改修の痕跡の可能性が考えられる。

南側の第42-1次調査区から続く溝で、北側の第43次調査でも確認されている。今回

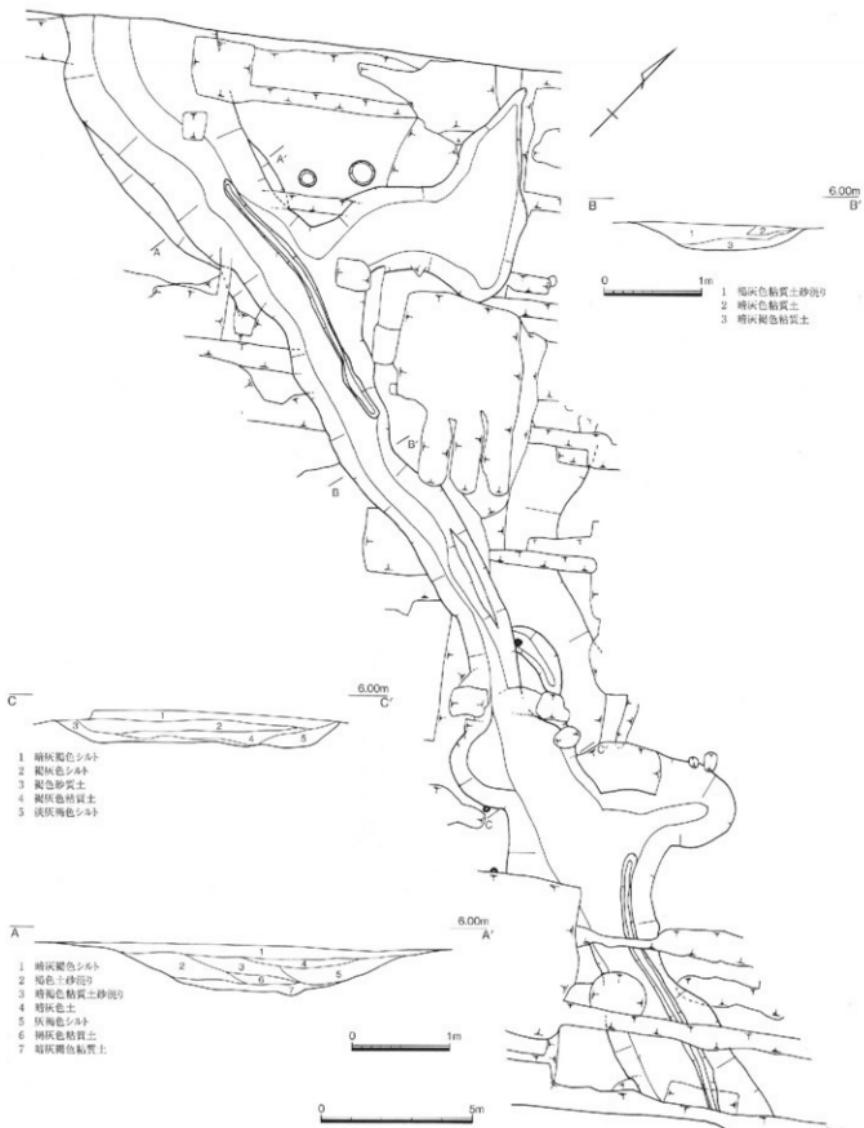


図17 SD01平面・断面図

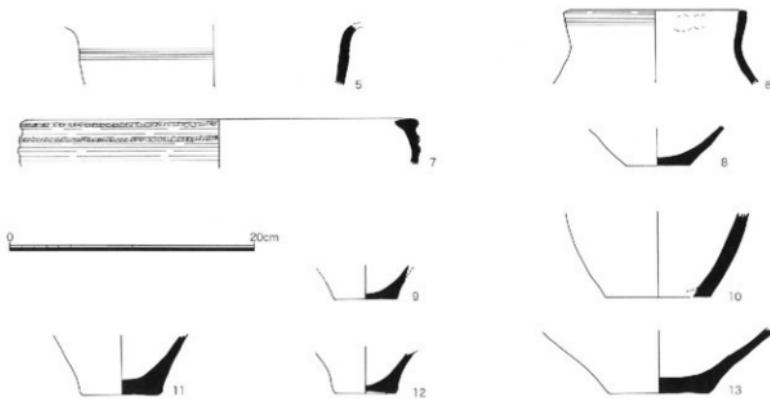


図18 SD01出土遺物実測図

の調査では出土遺物が少なかったが弥生土器が出上した。以前の調査の出土遺物から  
弥生時代中期前半のⅡ様式の時期と考えられる。

**出土遺物** 図18中5は弥生時代前期の壺である。ヘラ描きの沈線3条が施されている。表面は  
磨滅しており前期の土器はこの1点のみであるため混入した可能性がある。

6は弥生時代中期の壺、7は鉢である。いずれも細片で磨滅を受けており細部は不  
明である。

8～13は弥生土器の底部である。

**SD02** 調査区西部を南北に流れる幅1.7～2.7m、深さ15cmほどの溝である。方向は現在の地  
割りに沿っている。

何時期にもわたって溝が掘りなおされたようで、底部は幅30～40cmの細い溝3～4  
条が交錯したようになる。

遺物も中世後期から近世にかけてのものが含まれている。

**流路** 調査区中央部より北西端にかけて第1遺構面基盤層を削り込んで砂層が堆積してい  
る。古い時期の流路と考えられる。幅4.0～6.0m、深さ60～90cmを測る。

含まれる遺物は、僅かでいずれも磨滅している。

縄文時代晩期と思われる貝殻条痕をもつ破片が  
みられる。

**遺構に伴わ  
ない遺物** 遺構に伴わない遺物として、遺構面上から石鎚が  
1点出土している。

サスカイト製の凹基式の石鎚で、長さ1.8cm、幅  
1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.59gである。

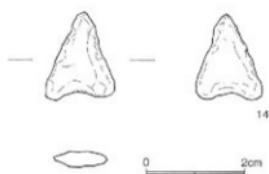


図19 遺構に伴わない出土遺物

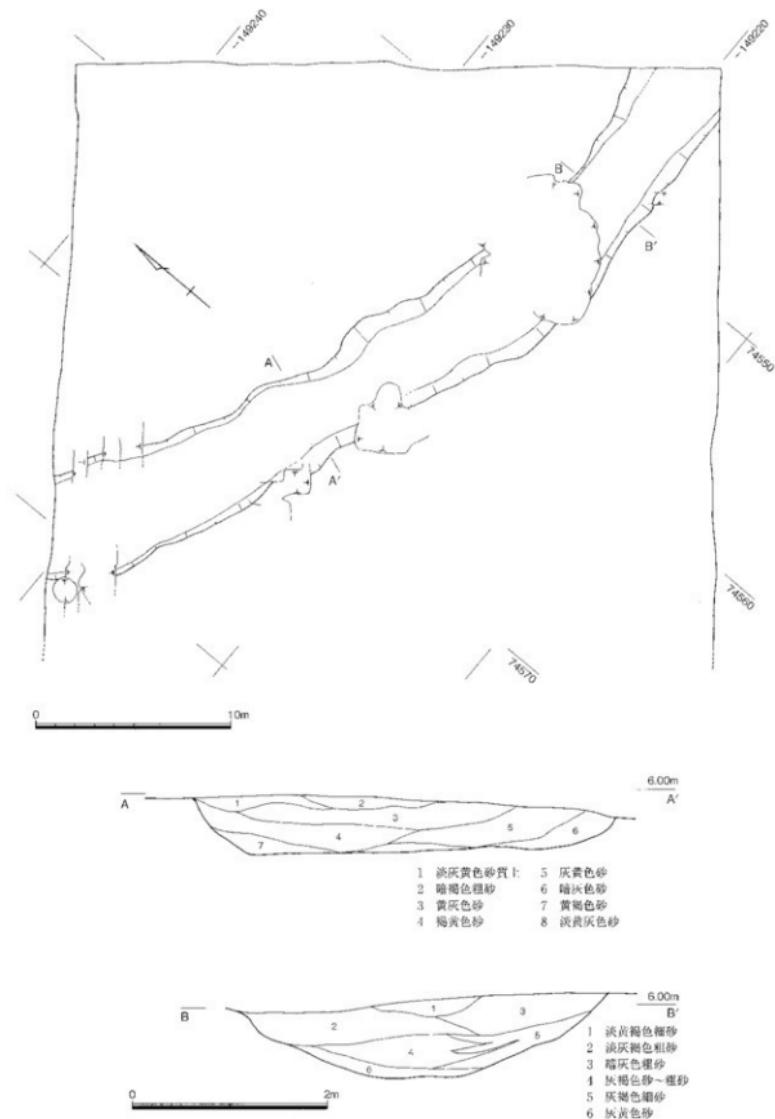


図20 流路平面・断面図

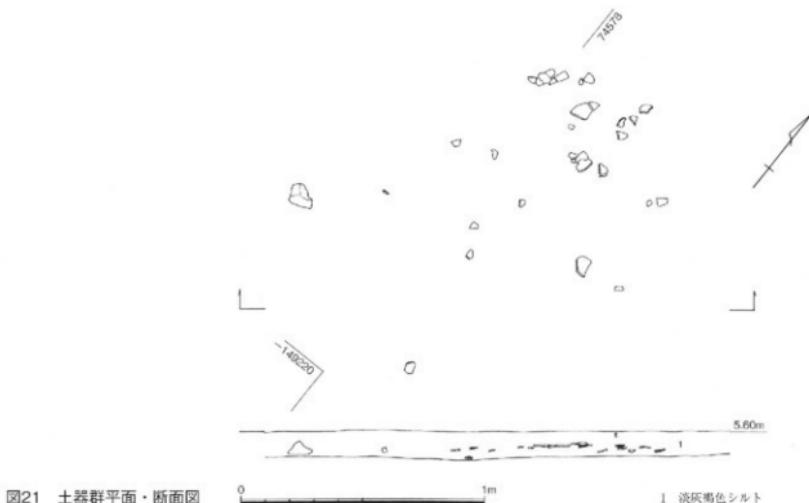


図21 土器群平面・断面図

## 第2遺構面

調査区の中央部から南東部にかけて、第1遺構面の下に僅かに遺物を含む淡灰褐色シルトが堆積している。この上面において部分的に遺物が集中する土器群が確認された。

### 出土遺物

#### 土器群

淡灰褐色シルトからは、土器の小片数点とサヌカイト製の楔形石器が1点出土した。調査区の中央部において $1.6 \times 1.3\text{m}$ ほどの範囲で土器が集中する部分が検出された。遺構としてのプランなどは確認できなかった。土器は摩滅が激しく時期を判別する特徴的な部位も含まれていなかつたため時期は不明である。

### 下層流路

遺物を含む淡灰褐色シルトを除去した下に存在する淡灰黄色シルトにおいて砂層が堆積する流路状の痕跡がみられたため断ち割り等をおこなつたが、遺物等は確認されなかった。

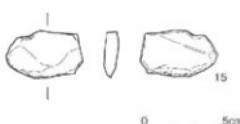


図22 淡灰褐色シルト出土遺物実測図



挿図写真11 土器群出土遺物

### 第3節 小 結

今回の調査においては、第42-1次調査において検出された弥生時代中期の溝SD01をはじめ、中世の水溜め状造構や下層の土器群などを確認することができた。

SD01は、溝浚えや改修の可能性が考えられることから、どのような目的をもって掘削・維持されたのか今後の課題であろう。

また以前の調査においても、断ち割り調査によって弥生時代以前の土壤化層は観察されていたものの遺物等は確認されていなかった。今回、弥生時代の遺構面の下に、古い時期の遺物包含層・土器群が確認できたことは興味深い。

全体的には、調査区の北東ほど削平が激しく遺構も希薄で南西にいくに従って遺構が増加するようである。

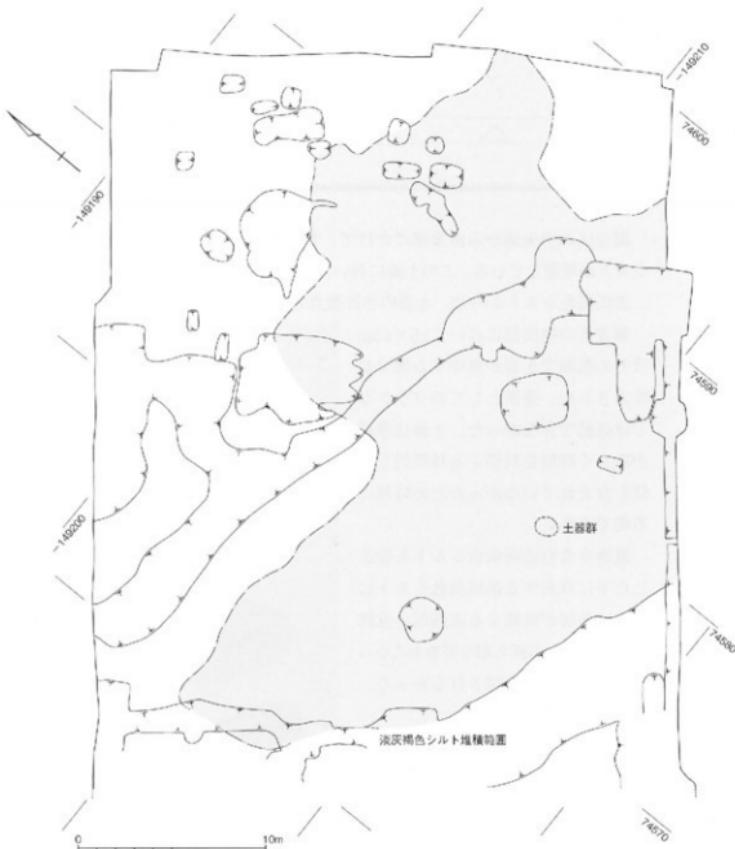


図23 第2造構面平面図

## 第5章 自然科学分析

### 第42-2次発掘調査における自然科学分析

株式会社古環境研究所

#### I. 花粉分析

##### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

##### 2. 試料

調査対象は、北部中央部のA地点とB地点である。分析試料は、A地点ではSD01の第15層（暗灰色粘質土、試料1）、第18層（暗灰褐色シルト、試料2）、第16層（暗褐色粘質土、試料3）、下層流路の第22層（灰色粘質土上、試料4）、第27層（暗灰色粘土（灰色砂・灰白色粘土ブロック混）、試料5）より採取された5点、B地点では第1遺構面ベースの第3層（灰褐色粘質土、試料6）、下層流路検出面ベースの第5層（暗灰褐色シルト、試料7）より採取された2点の計7点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

##### 3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの筋で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈淀に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

##### 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亞科、属、亞属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

#### 4. 結果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉11、シダ植物胞子2形態の計39である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉叢数を基数とする花粉ダイアグラムを作成した（図24）。主要な分類群の顕微鏡写真を挿図写真14に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

##### 〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雜管束葉属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ属、コナラ属アカガシ属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、モクセイ科、スイカズラ属〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ゴマノハグサ科〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、アブランカ科、ヤブガラシ、セリ亞科、シソ科、タンボポ科、キク亞科、ヨモギ属

##### 〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

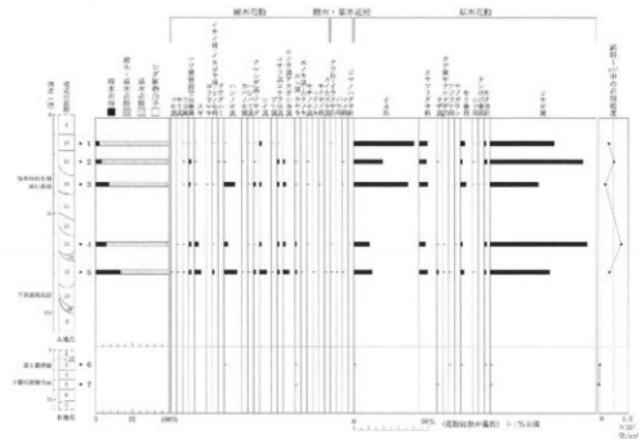


図24 北壁中央部における花粉ダイアグラム

表1 松野遺跡第42-2次発掘調査における花粉分析結果

学名	種名	北壁中央部						
		1	2	3	4	5	6	7
<i>Arborvit pollen</i>	樹木花粉							
<i>Podocarpus</i>	マツ科							1
<i>Aleurites</i>	モクシ						1	2
<i>Tilia</i>	ソラシキ						2	2
<i>Pinus subgen. <i>Diploxylon</i></i>	マツ属松垂管束亜属	1	1	2	2			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	6	4	8	7		
<i>Schisandra verticillata</i>	コウヤマキ	1	2	1	11	16		
<i>Taxaceae-Cephaelotaxaceae-Cupressaceae</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1		1	3	5		
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	ヤリグルミ		1					
<i>Abies</i>	ハンノキ属	1	1	23	11	33	7	
<i>Betula</i>	ガシラ科		1				1	
<i>Corylus</i>	ハリバチ科			2	1			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	タマシキ属-アサダ	2	3	4	1	6		
<i>Castaneopsis</i>	シロ羽	5		4	5	19		
<i>Fagus</i>	ブナ属	1				2		
<i>Quercus rubra, Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	3	5	4	5	6		
<i>Quercus rubra, Cyclobalanopsis</i>	コナラ属カガシ亜属		4	6	7	16		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	3	2	5	5	2	1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	ユウガキ科					1		
<i>Hedysarum</i>	トネノキ	1	1	1				
<i>Acacia turbinata</i>	イクシキイ科					1		
<i>Oleaceae</i>	スイカズラ属					1		
<i>Lonicera</i>								
<i>Arborescent-Nonarboreal pollen</i>	樹木・草本花粉							
<i>Moraceae-Urticaceae</i>	クワ科-イクラク科	1		2	2			
<i>Rosaceae</i>	バラ科					1		
<i>Leguminosae</i>	ツリエリ科		2	1		2		
<i>Sapindulaceae</i>	ゴマフアガサ科			1				
<i>Nonarboreal pollen</i>	草本花粉							
<i>Gramineae</i>	イネ科	142	67	110	44	45	5	
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	20	17	18	19	21		
<i>Polygonum</i>	タデ属	1		1	4			
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ属			1	3			
<i>Cisticlora</i>	アフラナガ科			3	3	1		
<i>Cyperus japonicus</i>	カヤツリグサ			1	2			
<i>Apocynaceae</i>	セキセキ科	10	4	11	6	9	2	
<i>Labiatae</i>	シソ科	1	1	1		1		
<i>Lauraceae</i>	タンボポ科			1	2			
<i>Asteraceae</i>	ムクゲ科	5	7	2	7	4	1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ科	132	216	99	275	149	20	2
<i>Fern spore</i>	シダ植物孢子							
<i>Monolete type spore</i>	島嶼漂浮孢子	1	5	8	8	5	2	
<i>Trilete type spore</i>	三連浮孢子	6	1	3	3	3		
<i>Arborescent</i>	樹木	18	28	56	61	125	1	
<i>Arborescent-Nonarboreal pollen</i>	樹木・草本花粉	1	2	1	3	5	0	0
<i>Nonarboreal pollen</i>	草本花粉	331	313	244	335	239	29	3
<i>Total pollen</i>	花粉总数	350	343	301	416	369	38	4
<i>Pollen frequencies of 1cm<sup>2</sup></i>	試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	3.5	5.2	2.3	7.6	3.6	2.8	2.4
<i>Unknown pollen</i>	未定花粉	15	20	14	15	21	8	0
<i>Fern spore</i>	シダ植物孢子	2	6	10	13	8	5	0
<i>Charcoal fragments</i>	炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)		

## (2) 花粉群集の特徴

### 1) A地点（下層流路、SD01）

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

下層流路の第27層（試料5）、第22層（試料4）では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約65～80%を占める。草本花粉ではヨモギ属が高率に出現し、イネ科、カヤツリグサ科が伴われ、セリ亞科、キク亞科などが出る。樹木花粉ではハンノキ属、スギ、シイ属、コナラ属アカガシ亞属、マツ属複雑管束亞属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属-ケヤキなどが低率に出現する。

SD01の第16層（試料3）、第18層（試料2）、第15層（試料1）では、草本花粉の占める割合が高くなり約80～90%を占め、イネ科の増加で特徴付けられる。

### 2) B地点（第1遺構面ベース、下層流路検出面ベース）

第1遺構面ベースの第3層（試料6）、下層流路検出面ベースの第5層（試料7）ともに、花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

### （1）A地点（下層流路、SD01）

北壁中央部の下層流路（第27層、第22層）、SD01（第16層、第18層、第15層）において、花粉群集の特徴から植生の復元を行う。

下層流路の第27層、第22層では、周囲に乾燥を好むヨモギ属が繁茂し、やや湿ったところにイネ科、カヤツリグサ科、セリ亞科などが生育していたと考えられる。近隣には湿地林や河辺林を形成するハンノキ属や、シイ属、コナラ属アカガシ亞属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属-ケヤキなどの広葉樹、スギ、マツ属複雑管束亞属などの針葉樹が分布していたと考えられる。

SD01の第16層、第18層、第15層では、草本花粉の占める割合が高くなり約80～90%を占める。イネ科の増加から、周辺の森林ないし樹木は減少したと推定される。

### （2）B地点（第1遺構面ベース、下層流路検出面ベース）

第1遺構面ベース（第3層）と下層流路検出面ベース（第5層）は、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥した堆積環境か、分級により花粉が堆積しなかったことが考えられる。

## 6. まとめ

松野遺跡第42-2次調査において花粉分析を行い、周辺植生ならびに堆積環境について検討した。その結果、

北壁中央部の下層流路では、周囲に乾燥を好むヨモギ属が繁茂し、やや湿ったところにイネ科、カヤツリグサ科、セリ亞科などが生育しており、近隣には湿地林や河辺林を形成するハンノキ属や、シイ属、コナラ属アカガシ亞属、コナラ属コナラ亞属などの広葉樹、スギなどの針葉樹が分布していた。上部のSD01ではイネ科を主に草本が増加し、近隣の森林ないし樹木は減少した。第1遺構面ベース（第3層）および下層流路検出面ベース（第5層）では、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥した堆積環境か分級により花粉が堆積しなかったことが考えられた。

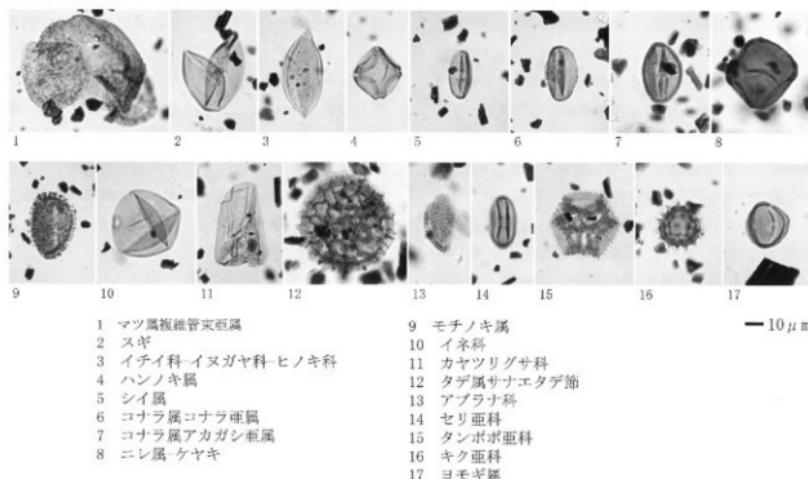
## 参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。  
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科學博物館収蔵目録第5集。60p.  
中村 純（1967）花粉分析。古今書院。p.82-110.  
中村 純（1974）イネ科花粉について、特にイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究13,p.187-193.  
中村 純（1977）種作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30.  
中村 純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p.

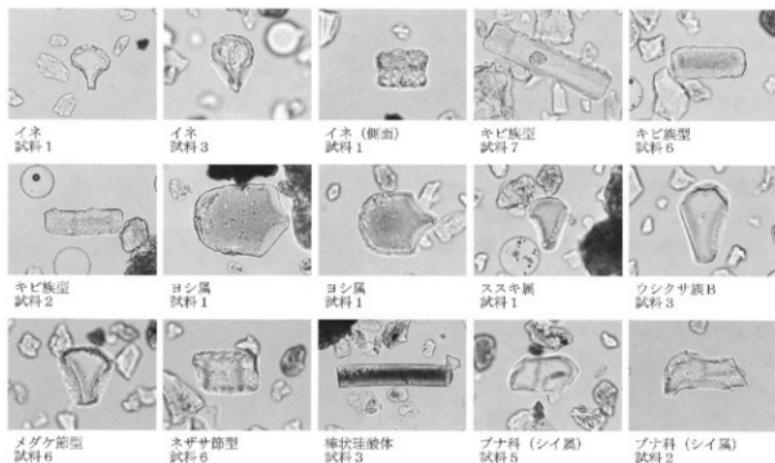


挿図写真13 A地点サンプリング部分

松野遺跡第42-2次発掘調査の花粉



挿図写真14 松野遺跡第42-2次調査の花粉



挿図写真15 松野遺跡第42-2次調査のプラント・オバール

## II. 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪藻 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査也可能である（藤原・杉山、1984）。

### 2. 試料

分析試料は、北陸中央部のA地点およびB地点から採取された試料1～試料7の計7点である。いずれも花粉分析に供されたものと同一試料である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

### 3. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピース法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

#### 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）

2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピースを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）

3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱水処理

4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去

6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10～5g）をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。

### 4. 分析結果

#### （1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2および図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。（挿図写真15）

#### 〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、スキ属型（おもにスキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）〔イネ科-タケアリ科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

#### 〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、その他

#### （2）植物珪酸体の検出状況

##### 1) A 地点

下層流路埋土の27層（試料5）と22層（試料4）では、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）などが検出されたが、いずれも比較的少量である。SD01埋土の16層（試料3）から15層（試料1）にかけては、ヨシ属が増加し、イネが出現している。イネの密度は700～2,200個/gと比較的低い値であり、種作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっている。

##### 2) B 地点

下層流路検出面の5層（試料7）では、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。第1造構面の3層（試料6）では、イネおよび樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）などが出現している。イネの密度は2,100個/gと比較的低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっている。

## 5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

### (1) A 地点

下層流路埋土の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であり、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、キビ族、メダケ属（ネザサ節）などのイネ科草本類が生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはシイ属などの照葉樹が分布していたと推定される。

弥生時代中期とされるSD01の埋土の堆積当時も、おおむね同様の環境であったと考えられるが、この時期には周辺で耕作が行われていたと推定される。

### (2) B 地点

下層流路検出面（5層）の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であり、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、キビ族、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などのイネ科草本類が生育していたと考えられる。

第1遺構面（3層）の堆積当時も、おおむね同様の環

境であったと考えられるが、この時期には調査地点もしくはその周辺で耕作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属などの照葉樹が分布していたと考えられる。

## 参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケノコ植物の同定－古環境推定の基礎資料として－。考古学と自然科学, 19, p.69-84.  
 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38 (2), p.109-123.  
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オ・パール）。考古学と植物学。同成社, p.189-213.  
 藤原宏志（1976）プラント・オ・パール分析法の基礎的研究 (1) -数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p.15-29.  
 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オ・パール分析法の基礎的研究 (5) -プラント・オ・パール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表2 松野遺跡第42-2次発掘調査におけるプラント・オ・パール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	北壁中央部						
		1	2	3	4	5	6	7
イネ科	<i>Gramineae</i>							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	7	14	22			21	
キビ族型	<i>Panicoides type</i>	20	7	7	21	7	14	7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	20	14	29	7	7	7	7
ススキ属	<i>Miscanthus type</i>	33	21	14	14	7	7	7
チカサ族A	<i>Andropogoneae A type</i>	52	14	29	43	33	21	15
チカサ族B	<i>Andropogoneae B type</i>	7	14	14				
タケ類	<i>Bambusoideae</i>							
メダケ節	<i>Pleiodontia sect. Nipponocalamus</i>				7	14	22	
チカサ節	<i>Pleiodontia sect. Nezara</i>	26	29	22	21	13	21	30
ミヤコザ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>				7			
その他	<i>Others</i>	39	21	14	36	33	28	22
その他イネ科	<i>Others</i>							
長い毛起源	<i>Hairy hair origin</i>	20	21	14	7		21	
棒状胚体	<i>Rodshaped</i>	33	86	86	50	20	76	7
未分類等	<i>Others</i>	216	143	94	64	93	90	75
実木系群	<i>Arboreal</i>							
ブナ科（シイ属）	<i>Cannabaceae</i>	7	7	29	14	13	7	
その他	<i>Others</i>	20	14	14	14	7	14	
プラント・オ・パール総数	Total	498	406	389	298	238	340	194

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm): 試料の板比重を1.0と仮定して算出	
イネ	<i>Oryza sativa</i>
	0.19 0.42 0.64 0.61
ヨシ属	<i>Phragmites</i>
	1.21 0.90 1.82 0.45 0.42 0.44 0.47
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>
	0.41 0.27 0.18 0.18 0.08 0.09 0.09
メダケ節型	<i>Pleiodontia sect. Nipponocalamus</i>
	0.08 0.16 0.26
チカサ節型	<i>Pleiodontia sect. Nezara</i>
	0.13 0.14 0.10 0.10 0.06 0.10 0.14
ミヤコザ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>
	0.02

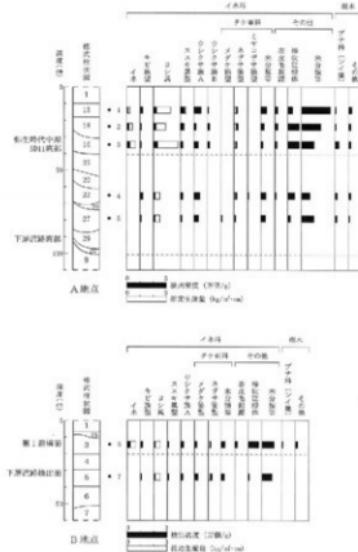


図25 北壁中央部におけるプラント・オ・パール分析結果

## 第6章 まとめ

最後に、今回の調査における成果について、時代順に確認し、あわせて周辺の調査結果と比較して本書のまとめとしたい。

### 中世

事業地のうち、南西隅420m<sup>2</sup>ほどについては第7-1次調査として先行して調査されており、中世の掘立柱建物や井戸状遺構などが検出されている。隣接する第42-1次調査区の西部においては、この建物の拡がりは確認できず、同時期の集落の存在を窺うことのできる明確な遺構としては、中央部において、地鎮に伴うと考えられる12世紀末から13世紀初め頃の須恵器塊の入ったピットが1基、第42-2次調査区においても、12世紀前半の遺物を含む水溜め状の遺構SK01が確認できたのみであった。

### 古墳時代

また、今回の調査では古墳時代の遺構や遺物については、ほとんど確認されなかった。

### 弥生時代

かわりに両調査区を南北に縱断して弥生時代中期の溝SD01が検出された。この溝は底部に浚渫などの痕跡も認められており、隣接する第43次調査の2区においても確認されている。

弥生時代中期の遺構については周辺の松野遺跡の調査区では、あまりみつかっていない。ただ、東に100m離れた大橋遺跡の第2次調査地においては、等高線に沿って掘削された幅50cm前後の溝十数条が検出されていて、耕作地に伴う可能性が指摘されている。<sup>(1)</sup>

しかし、土壤中の微化石分析では、樹木よりも草本類が優先しているものの、イネなどが卓越しない結果となっている。土壤環境が、微化石の保存にとって良好でなかったことに起因しているとは思われるが、耕作の内容については、今回のデータでは積極的に復元することができなかった。

### 縄文時代

さらに古い第42-2次調査の縄文時代晚期の流路は、第42-1次でも検出されていたものの、遺物が確認されなかったためトレンチ調査に留めたものである。ただし第42-2次調査においても出土した遺物は僅かで、摩滅したものであった。なお、100mほど北西に位置する第3-1次調査では、縄文時代晚期から弥生時代前期の遺物を含む南北の流路が検出されており<sup>(2)</sup>、時代を前後して同方向に流れる流路が存在したものと考えられる。

また、第42-2次調査において確認された第2遺構面においては、土器群の遺物の残存状況が悪いため時期が確定できず遺構の性格についても不明であるが、層位的に縄文時代晚期の流路以前と考えられ、周辺地区においてはじめて確認されたものである。今後類例の増加を待ちたい。

以上みてきたように、今回の調査地においては検出された遺構の数や時期から従前の古墳時代中期および中世の集落という松野遺跡の性格は弱くなり、遺跡としては縁辺部にあたるものと考えられる。

#### 註

(1) 本書6頁主要参考文献5

(2) 本書6頁主要参考文献2



挿図写真16 第43次調査地 2区弥生時代溝

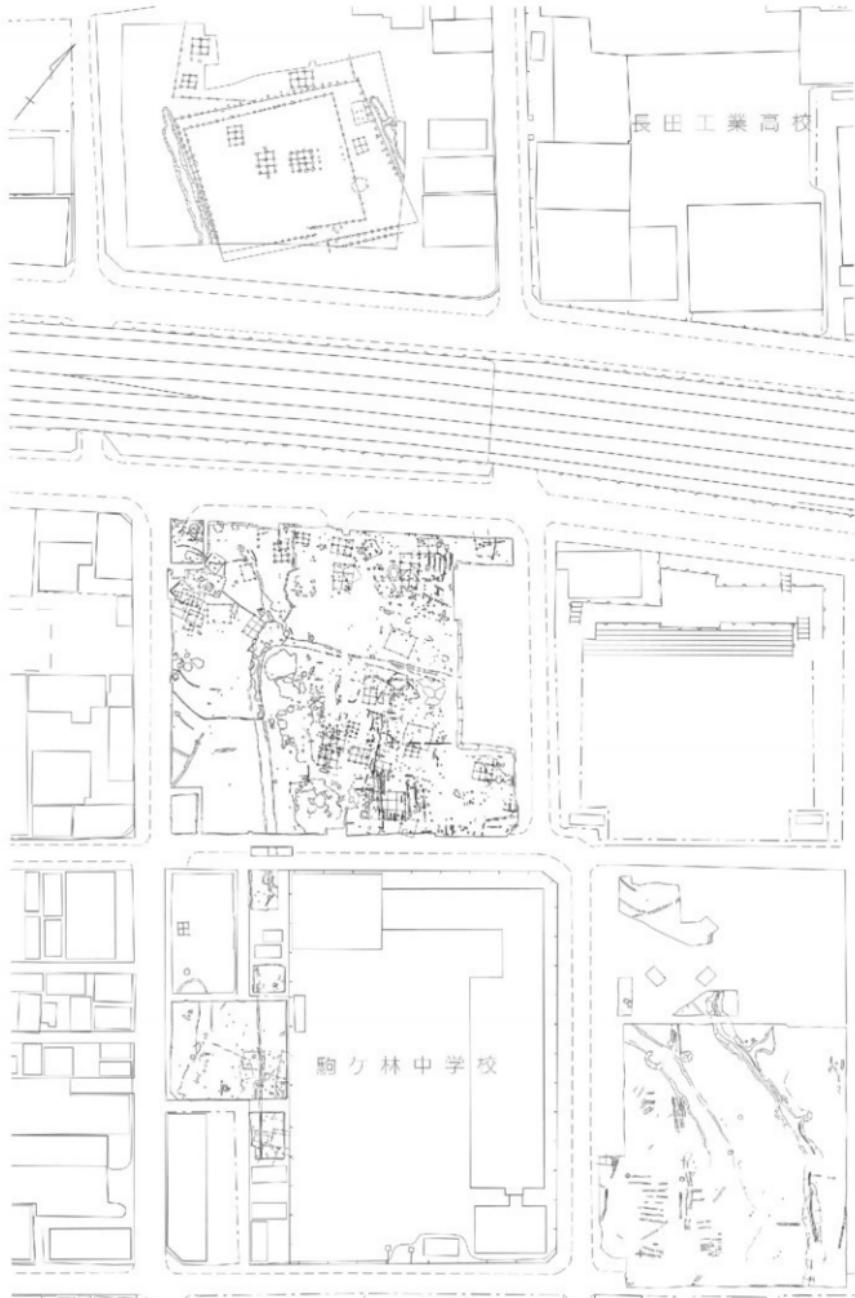


図26 周辺調査区主要遺構図 (1:1,250)

写 真 図 版



整備後の若松公園（2010.2）

図版 1



1 調査地遠景（南より）



2 調査地遠景（北西より）

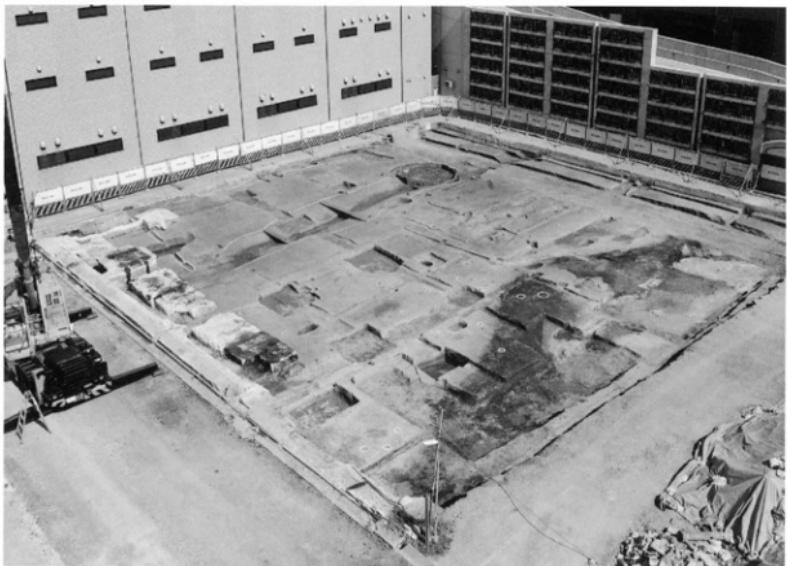


1 第42-1・2次調査俯瞰（モザイク）

図版3



1 第42-1次調査 調査区（東半部）全景



2 第42-1次調査 調査区（東半部）全景



1 第42-1次調査 調査区（西半部）全景

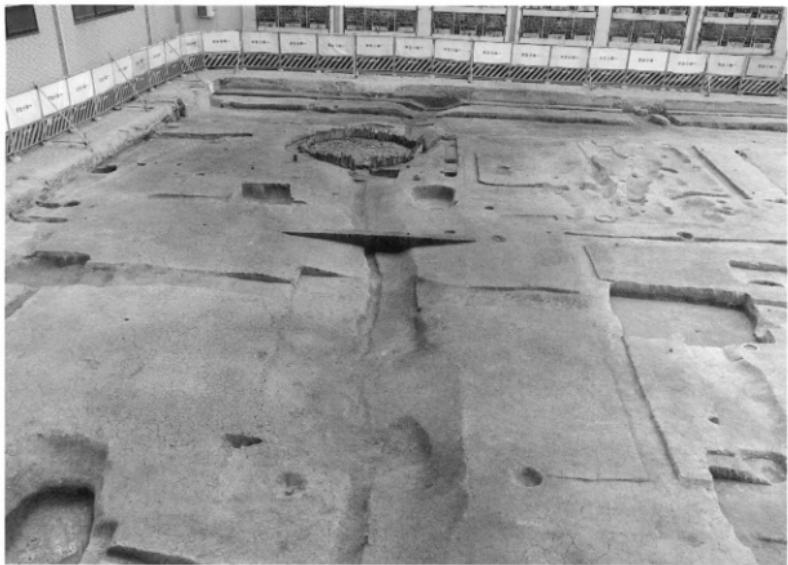
図版5



1 第42-1次調査 調査区（西半部）全景



2 第42-1次調査 Pit12



1 第42-1次調査 SD01

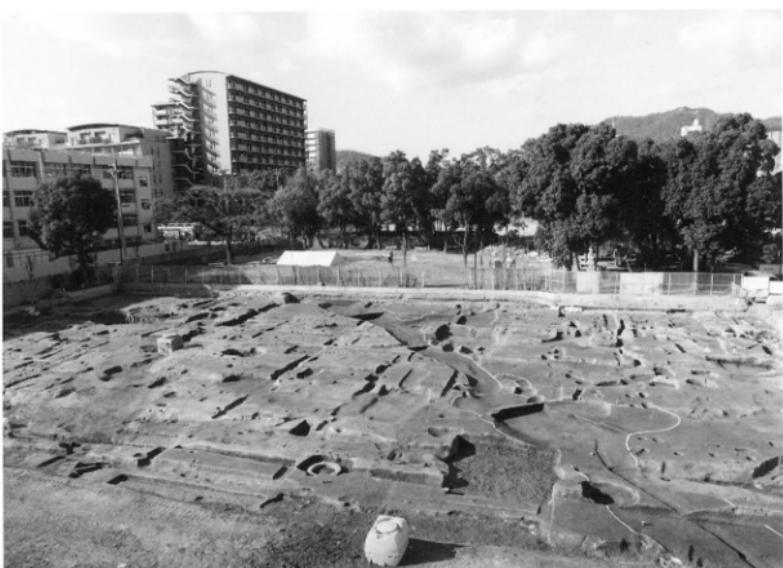


2 第42-1次調査 SD01 (断面)

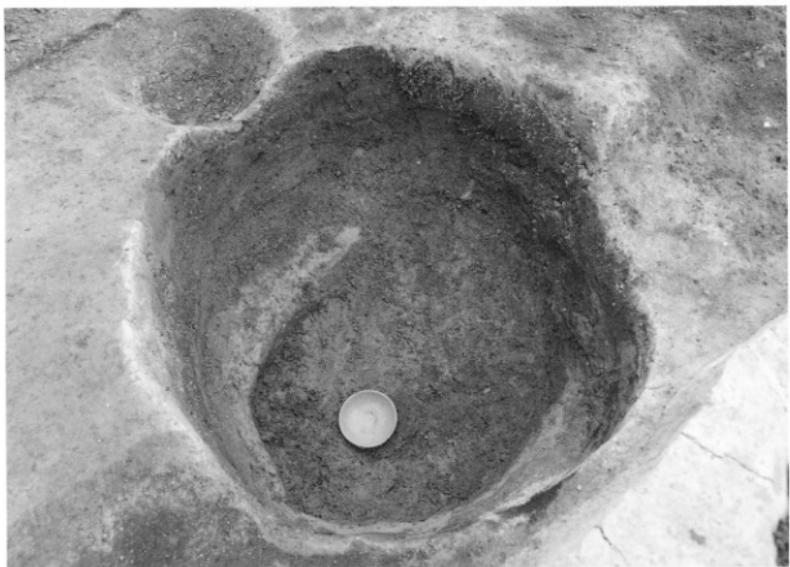
図版7



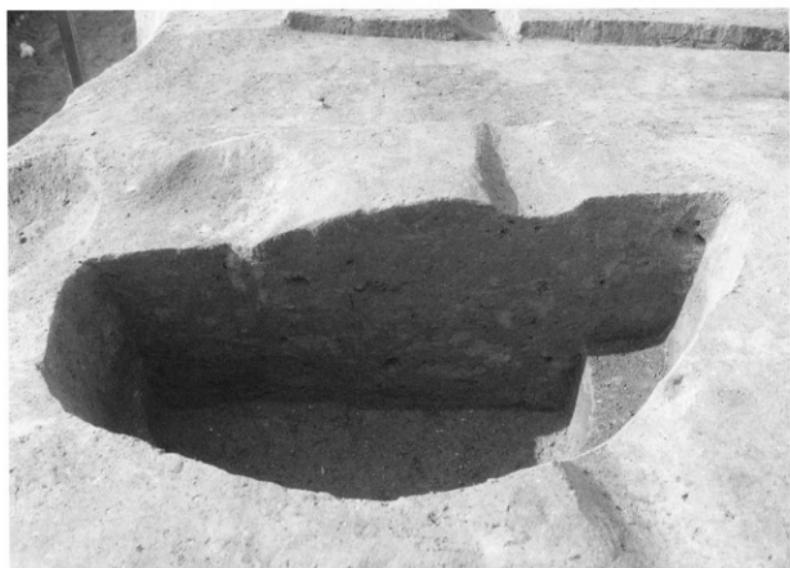
1 第42-2次調査 第1遺構面全景



2 第42-2次調査 第1遺構面全景



1 第42-2次調査 SK01



2 第42-2次調査 SK02

図版9



1 第42-2次調査 SK03



2 第42-2次調査 SD01



1 第42-2次調査 SD01 (断面)



2 第42-2次調査 SD01 (断面)

図版11



1 第42-2次調査 流路



2 第42-2次調査 流路（断面）



1 第42-2次調査 第2遺構面土器群



2 第42-2次調査 調査区北壁（断面）

図版13

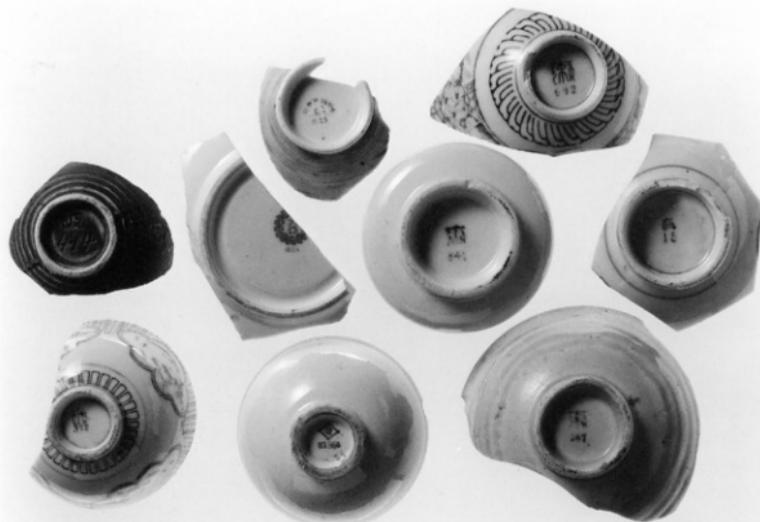


SD01

SD01

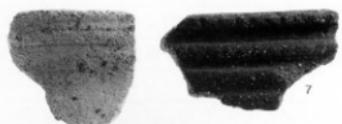


Pit12

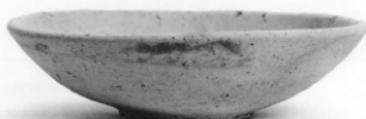


SX02

1 第42-1次調査 出土遺物



遺構に伴わない遺物 淡灰褐色シルト



SD01



SD01

1 第42-2次調査 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	まつのいせきだい42-1・2じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	松野遺跡第42-1・2次発掘調査報告書							
副書名	新長田駅南第2-B地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	内藤俊哉							
編者機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 Tel 078-322-6480							
発行年	西暦2010年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
松野遺跡	兵庫県神戸市 長田区若松町 2丁目	28106	4-24	34度 39分 19秒	135度 08分 40秒	42-1次 ~20080629 ~20081022 42-2次 20081028 ~20090213	1,800m <sup>2</sup> 2,108m <sup>2</sup>	公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
松野津遺跡	集落跡	縄文	~近世	溝、土坑、ビット		陶磁器・土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器・石器		
要約								
第42-1・第42-2次両調査区を南北方向に流れる弥生時代中期の溝を検出した。また第42-2次調査においては下層に縄文時代晩期以前の遺構面を確認し土器割りを検出した。								

## 松野遺跡第42-1・2次発掘調査報告書

2010.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課  
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社  
神戸市中央区弁天町1-1  
TEL 078-371-7000

